

新・鬼師の世界 ― 鬼吉系 :
― (株)丸市 ―

The New · World of Ogre-tile Makers:
The Onikichi Line
― Maruichi Inc. ―

高 原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: ttakashi@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

Maruichi Inc. is a unique ogre-tile maker among ogre-tile makers in Sanshu. Maruichi used to be an ordinary ogre-tile maker but the master of the second generation called Motohiko Kato changed the main job from making an ogre to making a family crest by using the same technique of an ogre-tile maker. I focus on not the second generation but the third generation called Yoshitaka Kato because he belongs to the member of the New · World of Ogre-tile makers. Yoshitaka is making not only the family crests but also ogre-tiles. He is intentionally cast back to the 1st generation style maintaining the way of the second generation. He is also absorbing other ogre-tile makers' techniques for the purpose of creating a new ogre-tile.

(株)丸市については既に『鬼師の世界』(高原2017)の[10]鬼吉系の中で、その成り立ちについて詳述している。初代が加藤晴一(1906-1978)、二代目が加藤元彦(1937-)である。(株)丸市は元々、丸市鬼瓦工場つまり㊦鬼瓦工場であった。晴一は鬼板屋を兄の加藤市郎右衛門と、兄弟二人で始めている。その時に出資者である兄の市郎右衛門の「市」を取って、㊦鬼瓦工場としたのである。その後、代が替わって、元彦の時(1965)に、屋号を株式会社丸市に変更して今に至っている。『鬼師の世界』の(株)丸市(321~334p)では初代加藤晴一と二代目加藤元彦を中心に描いている。(高原2017)

ところが、現在(2022)は代表が元彦の長男、加藤佳敬に移っており(代表取締役2009年41歳)、当時の丸市とは世代が変わり、佳敬が社長として、そして鬼師として活躍している。この状況は必ずしも(株)丸市に限った出来事ではない。愛知県高浜市、碧南市に点在する多くの鬼板屋に起きていた状況であり、各鬼板屋の社長ないしは親方が、息子の代に移っている事が『鬼師の世界』以降の全体に亘る大きな変化である。そして、私自身が知らなかった新世代の鬼師が活躍しており、此处に新たに「新・鬼師の世界」と銘打って、新しい鬼師の姿を描いてみたい。旧世代の鬼師と新世代の鬼師を比べてみることによって、何が今進行しているのがより鮮明になって来る。

加藤佳敬(1968~)[丸市三代目]

(株)丸市の三代目として活躍しているのが加藤佳敬である。昭和43年(1968年)8月31日に生まれている。2017年に『鬼師の世界』を出版したが、その時点(2016年まで)では、佳敬とはほとんど交流はなかった。実際に「丸市」の章で、佳敬についての叙述は僅か一行に過ぎない。佳敬の名前も一度出ているのみである。ところが、何と同じ年にほぼこの出版と入れ違いのように、佳敬と新たな交流が始まった。しかもその年月日さえもはっきりしている。当時、佳敬は三州鬼瓦製造組合の組合長をしていた。その組合長である佳敬が、高浜市役所の地域産業グループ所属の職員三名を率いて、私が住んでいた愛知県豊橋市曙町にあった借家を突然、訪れたのである。それが出会いであった。2017年3月21日のことである。私が鬼師を訪れることはあっても、鬼師が、しかも面識がほとんどない鬼師が、さらに鬼瓦組合の長をしている鬼師が逆に私の家を訪れたのである。用件は、国から「伝統的工芸品産業」の認定を三州鬼瓦産業として取得したいので協力してほしいという要請であった。この件については既に「新・鬼師の世界一周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション—はじまり」の中で詳しく書いている。(高原2022)以後、現在に至るまで、佳敬とはいろいろな事を通して交流を重ねて来ている。また佳敬を知った事で、『鬼師の世界』を2017年11月26日に出版し、1998年以降、長年に亘る鬼師の調査をまとめた安堵したのも束の間、次なるテーマが向こうからやって来たのに後になって

気づいたのだ。2018年4月1日から2019年3月31日まではインドへ鬼瓦の源流を見に行っていた。帰国して一息吐いて、始めたのが「新・鬼師の世界」のフィールドワークだった。テーマをいろいろ考えたが、辿り着いた先が、「新・鬼師の世界」だった。そうした意味も込めて、「新・鬼師の世界」第一号鬼師として、丸市の加藤佳敬が適任だった。佳敬の丸市についての話が始まった。

うちは、ええ、おじいさん(晴一)の代から、この鬼瓦作りという家業始まりまして、で、親父(元彦)が二代目、私が三代目になるんですけど。

環境的には昔からこの場所に鬼瓦工房があって、うちと工場が隣接するというか、あるんで、気づいたら、工場の中に遊び場があるみたいな。土も、昔は、こう、土山が敷地内に、土山があって、そこで、泥んこになって、土で遊んどったりとかしてましたからね。

だから、気づいたら、そこが何て言うんですか、仕事場が遊び場だったというのは、昔からそういう環境でしたね。

ただ、あんまり、職人さんが仕事をしているところに纏わり付いて行くことはしなかったですけどね。まあ、そうやって、仕事の邪魔になると、うちの父親なんか、怒ってたんで、あまり邪魔にはならないようにはしてましたけど。

成長していくに連れて、外に出るようになり、公園などで、サッカーや、野球などをして遊ぶことを覚え、工場内では遊ばなくなったという。他の鬼板屋でもよく聞いた話だが、幼少期の土いじり体験は、一般の人の幼児期体験とはやはりかけ離れている。つまり、鬼板屋に生まれ育った子供は、キリスト教の洗礼の様な「原・鬼師体験」的な刷り込みがなされるのだ。

やっぱり、土いじりして、何か遊ぶというのは、幼少期はそういった思い出がありますよね。

この土いじり体験はやがて、小学校の文集として結集して行くことになる。

うちの父親は僕に「うちを継いでやって行けよ」とは全然言わなくて…。

まあ、僕は自分の中で、あの、何て言うんですかね、小学校とかの文集とか見ると、将来、「うちを継ぐ」みたいな感じで書いてましたから。(笑)

多分、その時は言われずとも、そういう形でやって行くんだらうなというのは、自分の中であって、ま、そういう、何て言うんですかね、強い意志っていうわけじゃないんですけども、ま、それがこの家^{うち}に生まれ育ったあれなんだらうなという感じではうすうす思ってたんだなあという気がしますけど。

やがて佳敬は高校、大学へと進学していった。形の上では鬼板屋から離れて行ったことになる。大学は兵庫県芦屋市にある芦屋大学教育学部産業教育学科であった。今から思えば、芸術系の大学へ行けばよかったなと佳敬は話しているが、当時はまだ十分に目覚めていなかったのだ。

鬼屋さんて、結構デザイン系のね、芸術大学とか行ってる人が見えますし、ま、鬼亮さんなんか(二代目鬼亮、梶川俊一郎)芸大出の鬼師さんですけど、そういう、今にして思えば、そういうところ行っときゃ良かったのかなという…。

ま、若かったんでね、ただ単に、「エーっ、神戸か、いいな」とか、何となく親元離れてどっか行くのが、ちょっと憧れたっていうのが有ったりして…。

鬼板屋とは系統が違う大学に進んだ佳敬だが、心の中では丸市を継ぐ志は忘れていなかった。

ま、「継ぐだらうな」っていう感覚はあったですよ。あったけど、何て言うか、何か楽しそうじゃん、…みたいな感じで、その時は。

一旦軌道から外れたかに見えた佳敬は、卒業を迎え、22歳になると、軌道を修正し始める。しかし、就職先は(株)丸市ではなかった。窯業機械メーカー、(株)宮園製作所へ就職している。

(当時)就職氷河期みたいなのころがあって、一応就職活動みたいなことしてたんですけど、全然引っかけからなくて。

「ああ、あかんー」と思って、親に相談して、だったら、まあ、あの、窯業機械メー

カーってね、やっぱり、窯業に絡んでくるんで、「そういうところで働いてみるのも良いんじゃないか」って、言って、「そりゃ、そうだね」って言って、宮園製作所っていうんですけど、そこ。

ほんとは、僕、自分で、どこかに就職したいなと思ってたんですけど、親の力を借りずに。でも、それも、自分の力足らずで、なかなかうまく行かなくて、親父の紹介もあったりとか、知った人でもあったんで、窯業機械メーカーに3年間、3年という期限付きで。

3年という期限付きで入った宮園製作所であったが、意外に佳敬の性格に合ったのである。父親の元彦も外で働くことを勧め、「冷や飯食わせんと」といった姿勢であった。宮園製作所に入ったことによって、結果として、窯業機械に親しんで行くことになった。

製品はプレス、機械なんですけど、作るのは変わらんで。機械がね、すごく自分としてもじっくり来たのかなと。ま、そこでの経験がうちでも役に立ったりするんですけどね。

いろんな加工する機械だとか、機械というか、何て言うんですか、…。うちでも、土練機があったり、機械があるんですけども、そういうものの仕組みが分かっていると、故障したりとか、ちょっとした事でも、そこで教えていただいた技術が役立ってるんで。それは良かったなと思ってるんですけどね。

約束の3年間で過ぎると、佳敬は（株）丸市に入ったのである。佳敬が25歳の時の出来事であった。小学校の時に書いた文集の言葉、「うちを継ぐ」が実現したことになる。心の隅では片時も忘れてはいなかったのである。丸市に入った佳敬は鬼師になるべく、そして、（株）丸市の跡取りとして、三代目丸市になるための修業を始めた。

初めはやはり、あの、何もできない状態だったんで、熟練の職人さんに、家紋の、はじめは在庫を作ったりだとか、いろんな事を、型成形、石膏型の…。

ずっと始めは小さいものを、…から始まって、大きいものを作ってくというような、何年かね。そういう事、下積みみたいな感じでやりましたね。

ま、うちの中も、従業員が何人か、5、6人いたんで、分業でいろんなことを…。例え

ば、窯焼く人、配達担当、原型を作る人、在庫を作る人、みたいな感じで。それぞれ、皆、仕事の役割は決まっていたんで…。

ま、配達とかはしなかったですけど、その時は。ま、ある程度、何でも出来るような形で、ちょっとずつ覚えて行った感じですねえ。

鬼師としての技術も仕込まれていった。師匠は親方である加藤元彦である。

でも、家紋だけじゃなくって、その、うちは金焼きとかも主でやってるんで、あの、金の鯨とか、いぶしの鯨とか、^{しび}鷗尾とか、そういうのも作りますけど、そういった特殊な飾り瓦っていうか、そういうものも、親父が作るのを手伝ったりとか…。そういうところから、ちょっと技を教えてもらったり、そうしながら、どんどんどんどん技術を高めて行ったという事です。(図1)



図1. 金鯨 加藤元彦作 1991年 ((株)丸市オフィス展示室)

主に教えてもらったのはやはり親方である元彦だった。元彦と佳敬は師弟の関係であり、同時に、親子でもある。佳敬は元彦に対してインタビューの際に、全く不平は漏らしていない。佳敬もためらいなく、「師は元彦である」と何度も述べているのだ。元彦の指導が優れていたことが窺われる。

そうですね。イロハはそのへんから教えてもらいましたね。ま、^{へら}篋使うのも、ま、窯の炊き方とかね。切れやすいのはどうするといいのとかか。

あとは仕事に対する何て言うんですかね、…考えというか。「仕事はとにかく、手早く、サッ、サッ、サッと篋を使う。何回もペラペラペラペラ撫ぜとらんで、一発で、シャーっと仕上げれるようにせにゃいかん」とか…。ま、そんな事はよく言っていましたね。

ただ、「丸市」としての独特な事情、つまり、丸市は元々は他の鬼板屋と同じように鬼瓦を製造していた。ところが、二代目元彦の時、いろいろな事情で、家紋専門工場に切り替えている。このあたりのことは既に『鬼師の世界』の[10]に何が起きたのかについて記述している。そうした中で、佳敬が25歳で丸市に入って、家紋と鬼瓦制作とのギャップをどう捉えて居るかについて尋ねてみた。(図2)



図2. 家紋型置き場 ((株) 丸市の工場二階 2021年8月4日)

そうですね。確かに自分がうちに入ってから、鬼瓦の石膏型はあるんですけど、それで鬼瓦作ってるというのはなくて。

小さい頃は鬼瓦ばかり作ってましたけどね、職人さんが。型置きした鬼が乾燥させておったりとか、焼いてるとか、そういうのは見てましたけど。

ま、自分が入って来た時には、そういうのは無くて、今に近いぐらいの石膏型の家紋の型があったんですけどね。そういう風に、あの、要は、会社の形態がちょっと変わったんで、そういうところは普通の鬼屋さんじゃないなという事は感じていましたし…。

本当に鬼瓦というよりも、飾り瓦を作る、鯨、鴟尾、そんな感じにはなっていましたんで、実際に他の鬼師、鬼屋さんと比べると、ちょっと鬼屋というよりも、家紋屋という風な感じでは自分も受けてましたし、今だに、今もそうですけども、丸市イコール家紋屋という風に思われてるんで。(図3)



図3. 鯨 制作中の加藤佳敬 (丸市場にて)

この様に当時 (25歳) から今に至るまでも、(株)丸市は事実上、家紋を専門に製造している「鬼板屋」なのである。そこで気になるのが、「では、鬼瓦は作れるのか」という疑問が出て来る。佳敬はこの疑問に直球で答えている。

あの一、別にそれに争^あうわけじゃないですけど、まあ、家紋しか作れないんじゃなくて、「家紋の需要があるからやってるんだよ」と僕は言いたいんですけど。

ま、実際の話、鬼瓦の注文、ま、例えば、萩原さん、萩原製陶所の萩原さんには「うちの鬼、作ってくれよ」って言って、頼まれて作ることもありますし…。

「そういう需要があればいつでも出来るよ」っていう事は、あの、ま、SNSで上げてたりとかね。鴟尾とか、鯨、作ってるところ、アピールしてるんで、ま、分かってもらってるかなと思ってますけど。

そういう印象って根強いんで、ま、よく知らない人は「家紋屋さん、家紋屋さん」って言われますわね。

その鬼瓦を作る技術は誰から習ったのかが次に気になる点だったので、その旨を聞いてみた。

ま、親父ですよ。僕はどこにも、鬼屋さんの違うところに行って修業してないんで。親父からしか教えてもらってない。

やっぱり、親父が作ってるのを見ながら作るっていうのもありますし、あと、もう、8年、9年前かな、知恩院のやつ（御影堂鬼瓦の復元）やった時には、ま、その時は親父にはあまり聞かずに、ほとんど自分でやり上げましたけど。

ただ、どういう風に、その一、板荒地で箱作っていくとかは、親父から教えてもらった。それをベースに、後の、鬼の顔のこういった作り方とかは、そういうのは逆に、こう、たまに共同で作るものがあったりだとかした時に、他業種で、違う鬼師の人がやってるのを見たりというのも参考にして、作ったり、頭の中にこういう風にやるんだって考えてやってましたね。

親父だけの知識で、全て出来てる今の自分があるわけじゃないね。はい。

この様に、佳敬は鬼瓦の技術は基本的には父親である元彦から習っているが、全てではなく、その技術は他の鬼師からもいろいろな形で入って来ているのがわかるのである。具体的に誰から技術を吸収したのか尋ねてみた。

一番お世話になっているのは、うーん、どうなんだろうな…。やはり、仕事振ってられてる萩原さんとかお世話になってるかなとか。…気がしますね。

「これ、どうやってやるの」って言うと、「こういう風にやってやるの」って教えてくれる事もあるし。

萩原尚との繋がりについてさらに別の機会に聞いてみた。佳敬は次のように語るのであった。

知恩院御影堂（重要文化財）の修復が平成17年から始まり、それに伴って平成21年から数ヶ月かけ鬼瓦の修復作業を手伝うこととなりました。この仕事は萩原製陶所の萩原尚さんより声をかけて頂きました。萩原さんとはもう30年くらい前より鬼瓦組合の青年部として立ち上がった「若鬼士会」（ワカキシカイ）で活動を共にし、大変お世話になっています。（加藤2022：1）

萩原尚との関係の深さが窺われるのである。佳敬は萩原尚以外の鬼師についても言及している。

あと、窯の炊き方とか、そういうやつは、鬼源さんの、あの、岩根君（神谷岩根）に聞いたりだとか。ま、今はね、身体悪くして廃業されちゃってますけど、昔は一緒にやってたんでね、若鬼士会で。

あとは、鬼百さん（梶川賢司）とかね。あの人は丁寧に仕事される人なので、そういう風なのを見習いながら、丁寧にこういう風にやられるんだとか。どうも自分の中で参考にしてもらってるところがありますね。

鬼師も千差万別、いろんな人がいるんでね。ええ。作り方一つでも、皆何んとなく癖があって、参考になると一杯ありますね。（図4）

何んとなく聞くと聞き逃してしまうが、此处に挙げた鬼師の中で、「特に一番お世話になっている」という萩原さん（萩原尚）は同門になる間柄である。萩原尚の師匠は杉荘の杉浦伍一であり、伍一は、元々丸市鬼瓦工場の職人であり、その丸市鬼瓦工場から独立した人物が杉浦伍一なのだ。つまり、丸市の二代目、加藤元彦も同じ丸市鬼瓦工場の出であり、伍一は元彦の兄弟子という事になる。その伍一を師とする萩原尚から、佳敬は技術を習ったという事は、丸市鬼瓦工場の初代加藤晴一、もっと言えば、晴一が鬼師となった鬼吉の伝統を今、本家筋の佳敬が傍流に当たる尚から受け継いでいるといえる。ところが、その尚本人は、杉浦伍一を師とするものの、やはり佳敬と同じく、他の鬼師からも、流派



図4. 鬼瓦（鬼面）制作中の加藤佳敬（丸市工場にて）

を超えて技術を吸収して行った人物である。（高原2017）それ故、萩原尚は佳敬にとっては兄弟子的存在とも言えよう。ここに、丸市は親子二代（元彦と佳敬）に亘って初代加藤晴一の技術を受け継ぐ鬼師、杉浦伍一から、受け継いでいる事が見えて来るのである。

また、二代目元彦がいったんは鬼瓦をやめて、家紋へ移った流れが、三代目佳敬によって、振り戻しが鬼瓦方向へ起きているとも言える。そして、それは丸市の伝統の再構築になっている。しかも、他流派の伝統を組み込みながら。伝統は変容を成しながらも、世代を超えて受け継がれて行く事がこれでもわかる。その一里塚となったのが、第8回飾り瓦コンクールで、佳敬が出品した作品「からす天狗」が何と最高賞の「大賞」を獲得している。2014年の出来事であり、佳敬は45歳であった。丸市に入社したのが25才であり、その日から修業を始めて20年目の快挙という事になる。私自身は最近までこの件については、全く知らなかった。ところが、たまたま偶然にも、去年の11月に愛知大学の個人研究費を使って、研究用資料として佳敬に鬼瓦の制作を依頼したのである。翌2022年2月に佳敬の丸市へその鬼瓦を受け取りに行った。その場では現物を受け取りはしたものの、運搬の保護のため、佳敬はすでに嚴重に包装をかけており、その鬼自体はその場では見れなかった。ずっしりとした重さが印象にある。代わりに見たのは出来上がりの鬼瓦の写真であった。清算を済ませて、佳敬と私の二人で鬼瓦を愛車のランクル（1990年製）に載せて、恵那市

にある自宅に夜遅く戻った。翌朝、包みを解いた。出て来たのが「からす天狗」だった。その迫力に圧倒された。通常見慣れている鬼瓦とはかなり異なっており、正直、「エーっ！」と「オーっ！」が混ざったような感動を覚えたのだ。写真からでは伝わってこない何かがあるのは事実である。現在は自宅の近くに建てた書庫の木造書棚の上に置かれ、からす天狗鬼瓦が玄関を睥睨している。(図5)



図5. からす天狗鬼瓦 加藤佳敬作 (かもしか 羚羊の家：書庫、個人蔵)

幸いにも、佳敬は「からす天狗鬼瓦」との自分自身の出会いについて述べてくれたのである。佳敬の「からす天狗鬼面」誕生譚である。

知恩院の仕事で修復することになった鬼瓦のうち、私の心に深く刺さったのが鴉からす天狗の鬼瓦でした。この鬼瓦は他のどの鬼瓦より威風を纏った造形は特別であり、目が離

せないくらいの感動もありました。特徴としては、鼻がからすのくちばしのように弧を描き尖っているところ、顎鬚部分がカラスの羽根になっているところ、頭部の毛が螺旋状になっているところ、そして角が無いところ。当時の鬼板師の鬼瓦を作る技もさる事ながら、大胆な想像力には鬼板師としてとても敵わないと思いました。(加藤2022:1)

佳敬本人が自ら修復した「鴉天狗鬼面」に惚れ込んだのである。そして、その感動が平成26年飾り瓦コンクール大賞へ繋がるのだ。(図6)



図6. 制作中のからす天狗鬼瓦 加藤佳敬作 ((株)丸市、工場にて)

月日が経って平成26年第8回飾り瓦コンクールの作品募集が始まり、自分の中でそのときの力を目一杯出そうと応募する事にしました。以前感動した「鴉天狗鬼面」を自分なりにアレンジして作り、どこまで通用するのか腕試しの意味でもコンクールは最適でした。それ以降、私の鬼板師としての代表作となりました。(加藤2022:1)

最後ではあるが、伝統と変容の様を示す第三者のコメントを付け加えたい。それは第8回飾り瓦コンクール審査員、坪井勝人、名古屋造形大学特任教授のものである。



図7. 白地状態のからす天狗鬼瓦（乾燥後、焼成する。焼成した姿が図5）

迫力があり、伝統の中にも型にとらわれない新しい息吹が感じられる。（朝日新聞 2014.2.21.）

（株）丸市のビジネス

ここからは（株）丸市の仕事を中心にその特色を見て行きたい。初代は伝統的な鬼瓦屋であった。ところが二代目になって、事業を鬼瓦関係の仕事の中から、家紋に特化したのである。そして現在は、三代目はその仕事を受け継ぎ、運営している。佳敬は次のように語っている。

うちはね、家紋専属で作ることで、だいぶ会社が発展して行ってるんですけどね。

要は瓦屋さんと鬼瓦屋さんが、お客さんなんですけど、鬼瓦屋さんって、普通は家紋もつけて鬼を出すんでね、家紋作れる人ばっかなんですけど、ただ忙しい事になって来ると、家紋はちょっと面倒くさいじゃないですか。一から彫って行くの。なので、うちに注文くれたりとか、そういうので、だから、鬼瓦屋さんも、お得意さんだったり、まあ、瓦メーカーさんも当然そうなんですけどね。

つまり、仕事上の取引先は主として、瓦メーカーと鬼板屋という同業者仲間という事になる。他からの注文はないのかと尋ねてみた。

無いですね。

だから、あの、屋根の上の物件なんか、鬼屋さんからの、注文という形になって来ますよね。最近だと、中国向けの鴟尾とか、そういうのは同業さんからの仕事頂いて、やったりしますけどね。大きいやつとかありますね。ただ、そういうところは瓦メーカーさんから注文受けて、で、その注文がうちに来るみたいな。なんで、直接、お施主さんとの取引はうちではないですね。建築会社とか、ゼネコンからの注文は直接には無いです。

こうした現状の丸市を佳敬はどう運営していこうと考えているのか聞いてみた。現状分析とこれからの課題としての展望の様なものである。

ま、あの一、今の状況って、瓦から離れて行っている。「瓦離れ」ってよく言われるんですけど、そういう状況なので、その一、業界はやはり、寂しくなって来てるんですけども、じゃこのまま、ずーっと続けて行っても、瓦また需要が増えるかっていう事はないと思うんですよね。

ま、社寺仏閣はある程度需要は減らないと思いますけどね。

ですから、昔みたいに、住宅に瓦が使える状況が訪れるという事はないと踏んで、じゃ、鬼瓦を作る技術で、家紋作って来たんですけど…。

こうした現状に対して既に実行している企画が若鬼士会であった。それが、鬼瓦の技術を使ったインテリア商品の開発、および、その展示・販売である。

今からは、その、彫る技術とか、そういうものっていうのは、インテリアとか、ショーなんか出来るんじゃないのかなっていう事で、若鬼士会ってグループ、20年ぐらい前に作ったんですけど。

その中でも、インテリアとして、小さな鬼瓦作って、販売してたらどうって形で、活動ずーっとしてて、年に数回展示会やったりだとか、そういう活動やってる中で、

お客はやっぱり鬼瓦とか鍾馗さんだとか、いろいろな飾り物って好きな方も見えるんですね。

で、実際、屋根は瓦じゃないけど、家の中に置きたいっていう人もいるんで、じゃ、そういう人をターゲットに、ま、年齢層はちょっと上だったんですけども…。

若鬼士会を通じたインテリア商品の展示・販売の実績をもとに、更なる販売促進をより若い世代に向けて展開する話が続くことになる。それが、現代のインターネット社会インフラの活用に至るのである。この段階に入って来ると、旧世代の鬼師の伝統的な姿が消えて行き、新世代の鬼師の姿が明瞭に前面に現れて来る。文字通り、新・鬼師の世界が現実のものとなって、鬼板屋のオフィスも他の一般の事業会社と変わらず、パソコンが机上に何台か据えられ、スマートフォンを片手に、仕事が進行していくのである。

もうちょっと若い、若いといっても、まあ、30代、40代、50代ぐらい。その辺をターゲットに何か売れるものを商品展開出来ればいいかなと思って。

家紋も小さな額の中に入れて売ってみたりとか、鬼瓦も本当に10数センチぐらいの鬼瓦を作って、どこか家の中に置いてもらう。家の中に置いても、こりゃ、「魔除けとして使えますよ」というPRしながら、あの、これがもうちょっと浸透して行けばいいかなあと考えてますね。

実際のところ、ネット通販でね、PRして売ってるんですけど、始めの年(2019)はなかなか、こう、やっぱり売れなかったんですけども、年々、今が3年目に入っているんですけども、徐々に売上ちょっとずつ上がってるんですね。いい感じになって来つつあるんで…。

そういった、今、コロナ禍で、ネット通販っていうのは、またすごく売り上げがあがっていますけども、まあ、「今後もそういうようなインターネットでのショッピングというのは、どうも主としてやって行くようになっていくんだろうな」と思ってまして、その辺を目指した商品展開をもうちょっと頑張ってみようかなと思っています。

ネット通販は今では普通に、一般家庭で行われている姿である。実際に店頭に行かずに、ネット検索をして、情報の海をサーフィンして、目指す情報という得物を探り当て、ネットから注文し、支払いをし、宅配を通して商品が届く仕組みである。この仕組みを使うと、

生産者や販売者側は、これまであったその商品特有の商習慣の枠組みを離脱することが可能になる。さらに、これまでその商習慣ゆえに接触出来なかった消費者を新たに獲得可能になって行く。

また、現在も進行している新型コロナウイルス感染拡大による、社会活動の制限が実際に、2019年末以降、日本を含めた世界各国で起こり始め、ネットを使った在宅勤務が本格的に導入され、さらに、消費の形態も、ネット通販が必要に迫られて、一般化して行ったのである。そうした一般社会の動きと合わせたかのように、ネット展開を始めたのが佳敬であった。



図8. 楽天サイト (株)丸市

<https://www.rakuten.co.jp/kamon-maruichi/>

切っ掛けは「やりたい」って思ったんですね。ま、普通にアマゾンとか、楽天とか、いろんなところで買うようになっちゃうじゃないですか。何年も前から。で、そういうのを見てて。

通販サイト見てる時に、家紋のやつとか、鬼瓦のやつとか、売ってるところがあって、「あー、うちの商品も行けるんじゃないのかなあ」と思ったのが切っ掛けで…。

(その)切っ掛けで、やりたいなと思って、なかなか実際売ることまで行かなかったんですけど、ま、実名出しちゃうと、楽天市場から直接、営業の電話があって、「スタートアップで、ちょっと安くやれますよ」というのがあったんですね。

それまでは、もう、あの、それこそ、何十万円か出してっていうような話ですよ。始めるのが。それが、目茶目茶安くできるというので、案内があって、「じゃ、やってみよう」という事が切っ掛けでやり出したんですよ。

初め、店を出すのが結構ハードルが高いんですよ。(図8)

佳敬は上記のように、ネット社会の到来を自分自身を取り巻く日常生活の中に見て、自分も「やりたい」と思ったのが切っ掛けだと言っている。すると不思議なことに、ネット通販の会社から「やりませんか」との営業の電話が来たのである。一見偶然の一致のような現象ではあるが、ネットを介しての出来事であることを勘案すると、ネットのAI(人工知能)がネット通販会社の潜在的な顧客として、逆探知したものと考えられる。事実、ネットを使って何かあるものを続けて検索していると、それに関連するネット広告や情報がほぼ同時に、まるで偶然?!の出来事のようにしばしば入って来るからである。これと似た現象はYouTubeでも起こる。それはある意味、どこかで、誰かが、逆に見ているという事になる。それがネット社会なのである。ただ単に便利ではないことは確かであろう。

佳敬はネット通販を始めた「切っ掛け」の動機その2についても話してくれた。やはり新・鬼師なのである。旧・鬼師はまずやらないし、発想さえもしない考えであろう。

自分の中では、会社のホームページ作って、そこでも売ってたりするんですけど、そういうのだとなかなか売上げが伸びて来ないというのが…。

(売上げが)無い。見てもらえないんですよ、だいたい。

そういうショッピングサイト(アマゾンや楽天など)というのは、やっぱり凄くお客さん持ってる場所なんで、「じゃ、そういうところへ出した方が早いな」と。で、やる切っ掛けがそういう事なんですよ。はい。

新・鬼師の佳敬はすでに、ネット通販の次の段階を企画している。ネット通販の内容の拡大・拡充である。

今、ちょっと、まだ安いセッティングのやつをやってるんで、商品点数が絞られちゃうんですけど、まず。ちょっと何点だったかは忘れちゃったけど、もうちょっと自分の会社の商品ラインアップを増やして、やって行きたいなと思っています。

そっちへドンドン軌道に乗ってくれば、ま、それこそ、大きい鬼瓦もそこで売ってもいいのかなって気がしますがね。

鬼瓦の技術の応用として始めたインテリア商品開発をもとに、それまで行なって来た展示・販売の仕方を、ネット上に移し、ネット通販の仕組みを構築する佳敬である。すると将来的には、本業である鬼瓦の販売もネットを通して一般消費者へ向けて行なう可能性が出て来る。それは旧・鬼師の世界の商習慣との衝突が生じる可能性が大になり、一つの課題となって行く。その商習慣とは、基本的な販売ルートは業者間取引であり、その際には協定価格が組合で設定されている事である。

課題のその2が当面の差し迫った問題である商品ラインアップの充実である。これが充実して行けば行くほど、その中から何かのタイミングで、ヒット商品が誕生する可能性が高くなっていく。ひとたび、ヒット商品が生まれると、その商品が広まるにつれて、「丸市」の名称のブランド化が起り、他の商品も引っ張られて、消費者の購買意欲を高めることになる。この事については鬼福製鬼瓦所の鈴木良が述べていたことに繋がって来る。(高原2021)

佳敬は課題その1について続けて見解を述べている。面白い事に、その解決策が課題その2に連動して行く事であった。

ただ、安くは売れないですけどね。やっぱり、B to B という形、B to B (Business to Business: 業者間取引)。一般消費者に売るのって、今の通常のルートじゃないわけじゃないですか。そうするとあんまり安く売れない。普通の鬼瓦つつと。

こういったもの（テーブルの上にあった小物の類い）は、自分が決めて行くんですけども。組合は組合単価っていうのがあったりしてますんで。ま、その辺は、うまく、価格セッティングして…。

つまり、屋根材としての鬼瓦だと、組合価格といった鬼瓦組合内での、協定価格があり、それは壊せないことになる。一方の、小物類などの後から開発したインテリア商品は価格設定において自由が利くことになる。

価格表に載ってる商品は（価格は）いじれないですけどね。ただ、うちが今やってるやつは、組合のカタログに全然載ってないやつばかりなので、それは自分で決めて売れるという…。

このように、価格表に載っている商品以外の商品開発のラインアップ（陣容・構成）を広げて行く事が、ネット通販を成功させていく鍵になって行く事が見えて来る。

瓦離れ（(株)丸市のビジネス その2）

ここでのビジネスは(株)丸市を超えた日本全体を覆う広い意味でのビジネスを指す。そのテーマが「瓦離れ」である。一般の人はそれほど気が付いていないと思われるが、現代の日本社会においては瓦離れが相当進んでいる。昔からの家の屋根にはほとんど瓦が葺かれている。ただ、所によっては、瓦の代わりに、その土地特有の素材を使った屋根になっている。例えば、茅とか、藁とか、木の板、石の板などがある。もともとは瓦の方がまれだったのだが、特に江戸時代の17世紀以降、瓦は広がって行った。（高原2010）一般社会に本格的に瓦が広がって行ったのは、明治時代、19世紀末以降と言ってよい。ところが、日本家屋と言え、瓦葺が伝統的な姿であった。しかし、近年（1990年以降）徐々にその姿が消えつつあるのは事実である。特に、新築家屋においてである。そして家が新築される際、そこに家がもともと建っていた場合、古い家屋はしばしば壊されるのである。さらに、建てられる建物自体は、たいていの場合、洋風なものになり、伝統的な和瓦（棧瓦という）が葺かれずに、洋風な瓦、つまり平板瓦にまず変化していった。その時点で、自動的に消えたのが、鬼瓦である。事実、海外の一般家屋には鬼瓦は存在しない。日本の屋根に最も似ているのは、朝鮮半島の屋根瓦である。ところが、一見遠くから見ると鬼瓦に見えるその飾り瓦は、鬼ではなく、「龍」が主流である。これは私が現地へ2010年から一年間かけて、南朝鮮半島各地を現地調査した際に確認している。ほぼ同様のことを言及しているのが、富山弘毅である。（富山2017）つまり、日本は世界的に見ても貴重な「鬼（瓦）」が日本社会から消えつつあるのが現状と言える。

しかし、現代では、鬼瓦どころか、「瓦」が消えつつある。今では何と、平板瓦どころか、その平板瓦さえも使われなくなって来ているのだ。瓦の代わりに、板金加工による屋根葺きが一般に広がって行っている。その板金は、通称「ガルバ」と呼ばれるもので、正式名称は「ガルバリウム鋼板」である。メッキ鋼板の一種であり、昔、屋根材としてよく使われたトタンがそれである。トタンは亜鉛でメッキした鉄鋼板である。トタンと同様に身近なメッキ鋼板がブリキである。缶に使われるのが主で、錫がメッキとして使われている。つまり、ガルバリウム鋼板はガルバリウムという合金（アルミ+亜鉛）が鉄鋼板にメッ

キされたものである。(https://yanekabeya.com/galvalume/)

開発したのはアメリカ合衆国のベツレヘム・スチールで、1972年のことである。(https://ja.wikipedia.org) 新素材である。そしてこの新素材は、1982年に日本で商用生産が始まり、約40年の販売実績を持つ。日本で、徐々に広がり始め、2017年には新築で用いられる屋根材として一位を達成している。(フラット35住宅様実態調査) (図9) この事は、瓦が屋根材として、ガルバリウム鋼板に2017年に抜かれたのである。瓦離れが実態として現れたのだ。図9に粘土瓦とスレート瓦とあるが、粘土瓦が通常の瓦を指し、スレート瓦は天然のスレートすなわち石板をも意味するが量的には地域色が強い事も含めてわずかである。主には人造スレートすなわちセメント瓦又は繊維を入れて強化されたセメント板(形状は自在)を指す。ここで問題視しているのは粘土瓦である。その変化の様は平成7年(1995)からのグラフ上の推移をみると、平成29年(2017)に至るガルバリウム鋼板の影響拡大の様が見えるのである。

また「経済産業省工業統計(2019)」における粘土瓦出荷枚数も同様の変化を数字上示している。1990年全国合計、1,510,432千枚だったものが、1993年をピーク(1,604,892千枚)に毎年、若干の上下はあるものの、減少し続けている。そして、2017年(291,569千枚)となり、2019年(277,353千枚)に至っている。約1/6弱に減少している。中でも、「いぶし瓦」(伝統的な和瓦)の減少が著しく、1990年(451,567千枚)だったものが、2017年には48,153千枚となり、約1/10強に落ち込んでいる。全体を見ると、「瓦離れ」そして特に「和瓦離れ」が進んで行ったことが見えて来る。

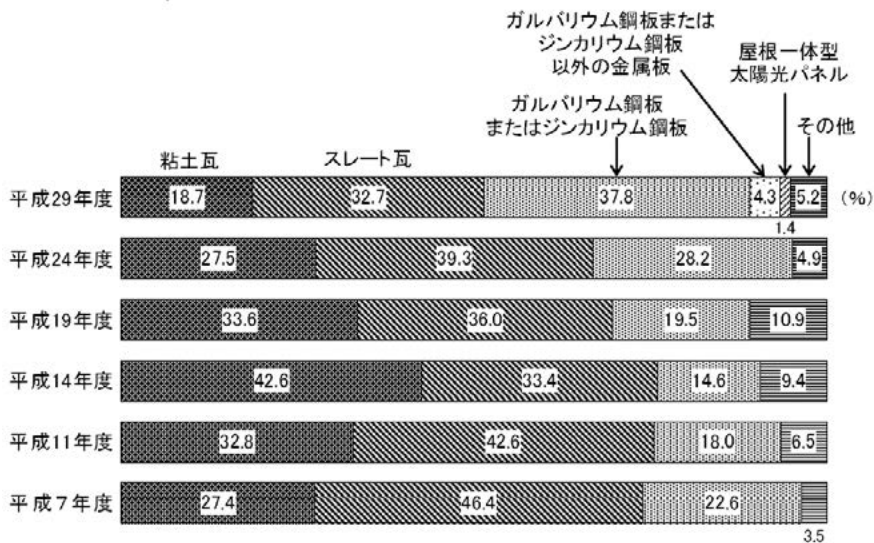


図9. フラット35住宅様実態調査2017年 屋根葺き材 図7 (2)-1

<https://kamisei.co.jp/news/15448>

しかし、「いぶし瓦」は2017年以降、毎年回復の兆しを示している。2018年（53,762千枚）、2019年（57,318千枚）となっており、僅かながらも、日本屋根への復活・回帰の動きが起きているのは事実である。一方、「うわ葉瓦」の方は対照的に、減少を続けている。つまり、ガルバの浸食が日本建築に対しては止まり、逆にいぶし瓦が復活して来ている。平板瓦（うわ葉瓦）のガルバへの移行が全体的に進んでいると言えよう。しばらくこの動きは静観する必要がある。

この瓦離れの現状に、佳敬は言及している。

やっぱり軽い屋根、…ていうのがいろいろそういうイメージを植え付けられちゃってるんで。実際、こう、ランニングコスト考えて、「瓦がいいんだよ」って事を説明しても、そうそう、じゃ、「二十年経てば、瓦の方が絶対トータルで言ったら安いんじゃない」とか、ま、そういう風にハウスメーカーも売らないし、工務店さんも、そうやって提案してくれないですし…。

工期が早いとか、作業も楽だという事で、瓦からどンドンどンドン離れて行ってしまいうんで…。そういうところはちょっと辛いですね。

「2017年ガルバ事件」（あえて事件と言う）とほぼ軌を一にしていることがわかる。では、瓦から離れて行く何か切っ掛けはあったのだろうか。佳敬はこの事についてハッキリした考えを持っていた。

そうですね。僕が一番思うのが、ま、皆さん（鬼瓦組合員+世間一般の人々）そうだと思いますけど、「阪神淡路大震災」（1995年1月17日午前5時46分発生）が一番初めですよ。あれで、要は、「頭が重い瓦で倒壊してしまった」っていうのをすごくPRされてしまって、そっから始まって、九州の震災、あとは新潟の方かどっかありましたよね。あとはね、東北の震災。震災があるたびに、どンドンどンドン、瓦っていうものは重いからっていう感じで…。

実際、重いんですよ。重いんですけど、施工をちゃんとしてればこんなにいい屋根材はないと思うんですけど…。

ただ「重い」っていう一点だけを責められちゃって、悪者されちゃってるんで、だから辛いっすね。良いものをそう言われてるのを。

阪神淡路大震災の時、NHKが被災地をヘリコプターで実況中継をし、ライブ放送しながら、「多くの家屋が瓦で押し潰されてされています!!…」と繰り返し叫んだのが、人々の脳裏に焼け付けられたのである。被災地の映像と共に、何度も放映されたのだ。消えがたい刷り込みが、NHKによってなされたことが大きく影響している。確かに空中から眺めた被災地の様子は、黒い瓦にペシャンコに押し潰された家が、延々と広がる悪夢のような現状だったのは事実である。ところが、そのレポーターが繰り返す言葉と被災地の映像が重なり合って、結果として、瓦業界は文字通り壊滅的な打撃を受けたことになる。そして、それは、今も続いている。拭い去りがたい公的な報道機関による風評被害と言えよう。

側で聞いていた真由美が、口を挿んだのはこの時であった。「瓦がしっかり載っていると、倒壊しないって聞いたことがある」。この事は私も聞いたことがある。ただ、やはり、建物の造りがしっかりしている事が前提条件である。つまり、阪神淡路の地震の際は、戦後建てられた多くの家の造りに問題があったのだ。そうした話を聞いて、今風な譬えを真由美はコメントするのだった。

コロナで死んだんじゃなくて、実はワクチンによる心筋梗塞だったみたいな…。

佳敬は二人の話を受けて話し始めた。

特に阪神の時は、関西地区っていうのは、地震があまり無い所っていう、僕が聞いた話はそうで、それこそ、石の上に柱を載せて建てる家ばかりだったと…。

それを聞いて、直ぐに反応した私がいた。

僕の家もそうですよ。(大笑) 築石と言って。石の上に柱が立って、瓦の重い屋根で、柱を押さえる。そして、家全体がしっかり固定される。

事実、我が家はそうした造りの古民家で、既に築百年ほど経っており、昔ながらの「田」の字構造を持つ。かなり太い柱で組み立てられた家である。佳敬はそれを聞いて、話を続けた。

そうです。えー、ちゃんと筋交い入れて、昔の家建って、その、ちゃんとねえ、泥茅の壁があって、しっかり筋交いが入ってという建て方をしてたんですけど。

高度経済成長しとる時に、いっぱい建った家ちゅうのは、柱ばっかで、筋交いも入ってない。関西、そういう家ばっかだったんですよね。…で、倒れた。屋根が重いからだって言うんで…。そういうのが風評被害。(笑)

全国地震があったところは漏れなく、それでしたからね。

メディアによる風評被害は、特に、ネットが無い時代、マスメディアによって、一方的に偏った情報が流され、その情報が人々の間に定着してしまうという循環があった。情報の人々への刷り込みの仕組みである。一方的な情報の押し付けであり、反論・発信が出来ない状況がネットが登場する近年まで続いていた。これからは何らかの手段や機会を捉えて、瓦の良さや、日本建築の良さを情報として発信していく努力が必要になって行く。佳敬の言葉が続く。

ですからね、先程奥さんが言われたように、その、「暑くない」とかね、家の中が。そういう「瓦は熱を家の中に入れない」だとか。「メンテナンスが全然掛からないよ」とか。

佳敬が言ったような情報は意外に無く、私自身も、古民家に住むようになって(2017年



図10. ガルバリウム鋼板葺き屋根(高原家の台所、恵那市飯地町)

以降)、母屋に隣接する台所の建物がリフォームから5年経っており、今様のガルバ葺き屋根になっていたのだ。結果、住んでみて、実感として瓦屋根(母屋)とガルバ屋根(台所)との違いが分かった。佳敬の言葉とそれを実感として確認する私が出た。(図10)

昔は隙間風は入る家っていうのは、今では、家の建て方もね、変わって来てて、…あの、シックハウスとか、アレルギーだとか、ああいうのも、高气密、高断熱によって、ハウスダストが出て来たりだとか。

それで、いろんな薬剤使って、あの、粘着剤のああいう化学物質を吸って、アレルギーが出て来るのも、世の中の家が、そうになって来ちゃってるから。

昔みたいな、屋根、瓦で、家も昔ながらの家を建築すればそんな反応しない。身体に良い家が出来るんだよ。…という事を言ってほしいな、誰かが。

佳敬は言葉をさらに一言付け加えた。皮肉を込めながら、そして、笑いながら。

こんだけ暑くなって来ちゃうと、気象変化で。高气密、高断熱で、エアコン、カンカンに入れて、涼しいっていう家に住みたいっていう人は多いと思うけど…。(笑)

震災後、耐震基準法が変わって、壁面積を増すとかいう話ですよ。だから、今の家っていうのは、窓が小さくて、壁をいっぱい作って、耐震補強してるっていう。

昔のうちは入り口だらけじゃないですか。結構風通しがいい家。

今は、風通しが悪くて(笑)本当に空調で生きとる時代ですからね。そういうのはどうなのかなと思いますけどね。

昔に帰って、昔を思い出して、日本文化を広げてほしいなと…。(笑)

震災後、特に、阪神淡路大震災以後の日本家屋の構造上の変化について見て来た。そして、その変化を象徴的にも、実質的にも「瓦離れ」と表現することが出来る。ところが、もう一つ重要な構造上の「瓦離れ」に至る変化が存在する。日本社会の戦後における家族構造の大変革がそれに当たる。佳敬は鋭くその存在を指摘するのだった。

やっぱり、こう、今のご時世、安く家が建てればいいのかなあという感じになっちゃうのかなあという感じがしますし。

ま、核家族化になって来て。昔は家も代々そこに住むっていうのがね、普通だった世の中だったですけど。今は、その世代、その世代、家を建てちゃう。

家を受け継いで行くっというのが無いっていうのがね。そういうスタイルですから。

ヨーロッパの方なんかね、今だに、石造りの何百年も経（建）つとるような所を、中だけリフォームして住まれるてるじゃないですか。ああいう、ヨーロッパ的な考えっていうのは日本には中々無く、そういうのは何でかなあって…。

日本は先の大戦で負けて、憲法が変えられて、民法が変えられて、伝統的な長子相続社会が、核家族制に変えられて、日本の家（族）制度が意図的に崩壊させられたのである。その当時は、まだ現役世代が健在で、長子相続制が基本、伝統として行われていた。しかし、高度成長時代が来て、実質的な世代交代が日本で、本格的に始まると、核家族化が高度経済成長に伴う社会変化とともに、急速に進み始めたのである。それに合わせて始まったのが、建築ラッシュであった。そうした社会構造上の大変化の上に起きたのが、阪神淡路震災後の「瓦離れ」だったと言える。

まとめ

「新・鬼師の世界」というテーマのもとに、(株)丸市の変容を特に三代目加藤佳敬を中心に見て来た。三河地方で、伝統的な鬼板屋であった㊦鬼瓦工場は二代目になると、鬼瓦屋から鬼瓦を作らない鬼板屋、家紋屋に大きく変容した。屋号も変わり、株式会社丸市になっている。その(株)丸市が、今、三代目加藤佳敬の時代に突入している。三代目での大きな変化は、鬼師の技を使ったインテリア商品の開発と、ネット通販への参入、そして、鬼瓦制作への復古の動きである。

鬼師の世界も社会から独立又は孤立して存在するわけではない。日本社会の一構成単位として存在する。それゆえに、日本社会そのものの変容をそのまま反映し、その影響を受けて行く事を避けることは不可能である。その事をズバリ表しているのが、三代目が行っている、ネット通販への参入である。それが起きたのが丸市では、2019年であり、日本社会はすでにインターネットインフラが整備され、ネット社会に突入しており、今も続くコロナ禍が日本社会のネット化をさらに加速している状況である。その社会変容に対して、

生き残りをかけ、日夜努力を重ねているのが、「新・鬼師」、加藤佳敬である。「旧・鬼師」の世代ではこの変化に付いて行けない事態となっている。

もう一つの大きな変容が「2017年ガルバ事件」である。もちろんこの事が日本において社会的なニュースになっているわけではない。しかし、鬼師の世界を探求している私としては、驚愕的な事実として受け取らざるを得ない。なにしろ、鬼師は瓦（文化）があつてこそ、存在し、その特異な伝統文化を六世紀以降、延々と伝えて来たのである。この二十一世紀の現代に至るまで。その肝心要の屋根葺き用建材としての瓦が、新素材のガルバリウム鋼板に屋根材の座を2017年に追い抜かれたのだ。つまり「瓦離れ」が加速化しているのだ。別の言葉で言うと、日本の屋根から瓦が消えて行っている事になる。当然、鬼瓦は出る幕は無い。これは主に一般民家に起きている変容である。社寺仏閣はまだ大丈夫だから、鬼師の世界は安心であるという声は時々耳にする。しかし、且つて豊橋にいた頃、神石山に登り、尾根を散策していた時に、山中で寺跡を見つけ、そのお寺が移築され、現在もあることを看板から知り、矢印に沿って山を下りて行ったのである。やがて寺の屋根が見えて来た。遠くから見ると、普通の寺の屋根であった。ちょうど山の上から下を見下ろす感じになって、寺は主に屋根が目に入って来たのだ。近づくと瓦葺きで、大きな鬼瓦も付いており、「すごい」と感動したのである。ところが、さらに近づいてよく見ると、全て板金で葺いてあったのである。目を疑うとはこの事である。張り子の虎だった。その事は当時かなりショックな出来事で、その寺の住職の見識を疑うと内心ひどく思ったほどであった。その忘れていた記憶が、今回の2017年ガルバ事件によって、「これは徒事^{ただごと}ではない」事実として蘇って来たのだ。

第3の変容についてもすでに述べているが、時系列的には最も古い変容であり、特に、第2の変容の核心部分に当たる。第二次大戦後、連合軍（米軍）による日本占領下において起きた新憲法発布、民法改正とそれに伴う核家族制度の日本への導入である。伝統的に長子相続が基本であった社会が核家族制になり、日本の家制度が破壊され、家族が分断されて行った。日本社会の基礎が壊されて行ったと言える。民法改正当初はまだ家制度そのものが伝統として生きており、三世代、時には四世代にわたる大家族も普通に存在した。しかし、実質的な親世代が消えて行くにつれて、民法改正の効力が世代的な時差を伴って、ボクシングのボディ・ブローのように効いて来たのが、高度成長時代以降（1955年～）の流れであった。それが取りも直さず第2の変容へと繋がる原因となっている。

ガルバリウム鋼板が1972年アメリカ合衆国のベスレヘム・スチールによる開発である事を念頭に置くと、「住」の世界におけるアメリカ化が今まさに日本を文字通り覆わんとしていると言えよう。それは日本文化破壊が進行している事と同義であると言えよう。衣、食、住、つまり、「衣服と食物と住居」は生活の最も基礎となるもので、何人といえども避けて通ることは出来ない。その最後の砦、「住」が此の期に及んで、破壊されようとし

ているのだ。日本を取り戻さなければいけない。

参考文献

- 朝日新聞 2014年「飾り瓦コン 大賞に加藤さん「からす天狗」題材に」朝日新聞 2014年2月21日
- ウィキペディア 2022年「ガルバリウム」<https://ja.wikipedia.org> 2022.8.26.
- 加藤佳敬 2022年「三州鬼瓦加藤」投稿文 2022年9月4日
- 経済産業省 2019年「経済産業省工業統計出荷枚数」経済産業省
- 住宅金融支援機構 2017年「フラット35住宅様実態調査」<https://kamisei.co.jp/news/15448>
- 高原 隆 2022年「新・鬼師の世界 一周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション— はじまり」愛知大学総合郷土研究所紀要第67輯：33-54.
2021年「新・鬼師の世界 一周縁の再中心化：マスメディアからネットメディア—」『文明21』第46号：103-125.
2017年『鬼師の世界』あるむ
2010年『鬼板師 日本の景観を創る人々』あるむ
- テイガク 2022年「ガルバリウム鋼板とは？ 30年以上は持つ素材なのか？」<https://yanekabeya.com/galvalume/>
- 富山弘毅 2017年『鬼瓦のルーツ 写真紀行 ～韓国、中国、カンボジア～』ルネッサンス・アイ
- 楽天市場 2022年 丸市楽天市場店 [トップページ] <https://www.rakuten.co.jp/kamon-maruichi/>